戦前期における参考事務のあゆみと帝国図書館

——資料紹介「読書相談ノ近況」(昭和十年六月　帝国図書館)——

稲村徹元

まえがき

本稿は、現在、当館参考書誌部一般参考課に保存されている、数少ない旧上野図書館参考課時代からの業務記録——後述第五項参照——の一つである標記資料(ペン書十九丁)を、全文活字におこすに際して、その成立の背景ともいうべき、旧帝国図書館時代における参考事務(Reference work)のあゆみについて、同時代の図書館史の中での位置づけを略説しようと試みたものである。

周知のように、わが国立国会図書館は、その創設を明治初年にもとめる旧帝国図書館(戦後、国立図書館と改称。さらに昭和二十四年国立国会図書館に統合されて、支部上野図書館となった)と、昭和二十三年に、元赤坂離宮内に開館した国立国会図書館(中央館)[1]とが、昭和三十六年に現在地(千代田区永田町)の〝新館〟に移り、はじめて一つの大図書館としての機能を発揮した。その蔵書の構成、目録の体系など所蔵資料の利用に欠くことのできない前提知識として、〝二つの大きな図書館が一つの屋根の下(建物)に同居している〟ことが、一般利用者だけではなく、奉仕部門に配属された新人職員などにも強調されるゆえんである。その〝参考事務〟のあゆみにおいても例外でなく、つねに百万近い蓄積である旧帝国図書館以来の蔵書を擁し、その組織においては、新館への統合よりかなり以前から一体化していたが[2]、旧上野時代にも、独自の伝統、諸トゥールに支えられ長年月の間発展してきたレファレンス・サービスの態様が見出された。現在の館員にも、終戦後、参考事務の再開第一歩を手がけた人々をはじめ、新館移転までの多事であった諸業務を支えた人々等多士済々である。それだけにまた、現代史として未だ語るに十分でない面もあり、わずかに、神田秀夫「司書と辞書」(「言語生活」一五六号　昭和三九年)、『上野図書館の経験を語る』(国立国会図書館「業務こんだん会」資料　第五号　昭和四二)等から当時の雰囲気がうかがえる程度である。

しかし、同じことは戦前までの沿革についても同様であり、いやそれ以上の困難が見出されるようだ。公刊の館史[3]も未だ『略史』にとどまり(以下引用の際は『八十年略史』と記載する)、「帝国図書館」の館舎完成の経緯を知るに重要な史料一つをとってみても、近

時ようやく紹介された（本誌第一号所収　有泉貞夫「田中稲城と帝国図書館の設立」参照）現時点にあっては当然かも知れない。あるいはまた、その館制のしからしめるところとはいえ、長年月にわたり業務の運営大綱がほとんど、その館長の専決・裁量にゆだねられ、[4] 今日、その発展のあとを探るに拠るべき規定・文書史料に物乏しく、かつ聴くべき旧職員も稀有となった現在である。以下ここでは、匆々の間に渉猟し得た断片的な文献を点綴し、傍ら、もっぱら基本的な参考文献を回顧し、つとめて近年における館界の研究成果を紹介補注しつつ、しばらく標記記録翻刻の解説に資したい。

一

一般に、戦前期の参考事務については、「文献的研究が先行して約四十五年の歴史をもつが、実践活動としては、大正初期から昭和四年頃までの日比谷図書館、大正末期の神戸図書館を除いてはあきらかでないし」（北島武彦『図書館奉仕論』≪現代図書館学叢書四≫昭和四四）、「図書館が利用者に奉仕する姿勢を確立していない戦前には［参考事務が］館界の共通な動きとまでならないのは当然のこと」でもあった（塩見昇「最近における図書館学の発展―図書館奉仕（二）レファレンス・ワーク―」図書館界一〇〇号　昭和四二）。これを極言するならば、その歩みは「アメリカの図書館サービスの系譜を負うという事実を確認することで十分」なのかも知れない（長沢雅男『参考調査法』昭和四四）。

とはいえ、明治～大正期の館界のあゆみの中で、参考事務が不毛であったわけでは決して無い。[5] すでに、多くの〝わが国におけるレファレンス・ワーク〟研究文献[6]に引かれている諸先駆者たち（今沢、小谷、波多野、渋谷）の論究[7]を俟つまでもなく、夙に『図書館管理法』において、いわゆる「近世的図書館ハ……読者ト書籍トヲ結合スルヲ以テ理想トスル」の理念が説かれており、[8] 同時代において「図書館事務の実践を通じ、図書館の事に通暁して居る掛員が居て親切に相談相手になり指導して呉れる時は……公衆の便利はいふ迄もなく、館にとっても無益に図書の出納をしないで済むので、大いに手数を省略する事が出来る」と説く指導者[9]〈太田為三郎〉を帝国図書館は擁していた。さればこそ、ただに五十万を超す蔵書量の偉大さだけではなしに――帝国図書館の蔵書数が五十万冊を超えたのは明治四十一年であり、この（太田の）文の出た明治四十五年には五十三万冊となっていた――、館界においても、「学識ある指導者を置き、親切に閲覧者に助言を与へておる所は、唯一の帝国図書館を措いては、他に余り類例を発見せぬように思ふ」（阪本四方太「図書館の急務」明治四三）と評されたのであろう。[10]

二

しからば、その帝国図書館での、かかる「他に余り類例を発見せぬ」参考事務の実態はいかがであったろうか――との疑問につき、今、ただちにこれを明らかにできる資料は見当らない。後述のように、当時すでに蔵書中、大部の叢書資料等につき検索用の細目類が用意されていたにせよ、また、図書館当事者の生々しい苦斗ぶりは想像されるにもせよ、およそ前記阪本の評価は、やや過褒にすぎたとしか思えぬ、きびしい現実に――帝国図書館のみならず、多くの図書館が――喘いでいたのではなかったか。

帝国図書館の場合、たしかに、唯一の国立図書館として、その館制には、「帝国図書館ハ文部大臣ノ管理ニ属シ内外古今ノ図書記録ヲ蒐集保存シ及衆庶ノ閲覧参考ノ用ニ供スル所」と規定され、[11] さら

に館長（田中稲城）は、明治三十九年三月二十日、その開館式の式辞において、去る再度の戦役（二十七―八年の日清、三十七―八年の日露戦争をいう）に際し「公私ヨリ諸種ノ参考資料ヲ求メタル者頗ル多ク、本館準備ノアル限リハ、其求ニ応スルコトヲ得テ公私ノ便益少カラサリシコトハ、窃ニ信スル所」（ふり仮名は引用者による。以下同じ）とし、さらに図書館管理の「要ハ有用ノ図書ヲ撰択蒐集スルノミナラス、進ンテ世ニ之ヲ利用セシメ、其効用ヲ完全ニ発揮センコトヲ期スルニアリ。例ハ一事項ヲ研究調査セントスル者アル時ハ、凡テ蔵書中ノ之ニ関スル者ハ、其一書ヲ成スト他書中ニ混入スルトヲ問ハズ、尽ク之ヲ検索シテ余ス所ナク、且、読者ノ声ニ応シテ、速ニ之ヲ提出シ、以テ其研究調査ニ便シ、些少ノ遺憾ナカラシメンコト、平生ノ理想トスル所ナリ」との抱負を示した。[12]* また、この故にこそ早くから蔵書資料をとり扱う職員資質の向上を計り、「蓋シ図書館管理法ハ一種ノ専門ニ属」するが故に、その「図書館員（帝国図書館司書を指す―引用者）ハ諸学校ニ在テ実ニ教員ノ地位ニ相当シ少クモ其助教授ノ学力ニ相譲ラザル者タラザルベカラザルナリ」との意見を、要路に具申し、[13] また図書館が迂余曲折を経て不充分ながらも開館発足してのちは、その理想として、「凡テ蔵書中ノ書ハ・・・尽ク之ヲ検索シテ余ス所ナク・・・提出シ・・・、研究調査ニ便」（前出式辞）にせんがためにも、その閲覧目録をやがては字書〔辞書〕体目録に、発展させたいとの抱負を館界の識者に示した。[14]

* 田中稲城が、帝国図書館を一大参考図書館たらしめんとした努力の経緯とその挫折については、往年の竹林熊彦の研究や本誌第一号「田中稲城と帝国図書館の設立」（有泉貞夫）に詳しいのでここでは触れない。ただし、当時においても、欧米先進の国立図書館の機能を知る者ならば、等しく、同様の論をなすことは当然のことと考えられよう（明治三十九年三月、帝国図書館開館式における雪嶺三宅雄二郎、末松謙澄の祝辞に明らかである―『八十年略史』一一九～一二〇頁参照）。

また、帝国図書館の前身である東京図書館時代、田中を簡抜した当時の主幹手島精一にもすでに、同館を参考図書館とする方針のあったことの知られることも注目すべきであろう（―明治二十二年七月大日本教育会附属書籍館開館式における辻新次会長の言葉―〈西村竹間「帝国図書館沿革略」（図書館雑誌 第一号 明治四〇）参照〉『八十年略史』の八二頁にも引用）。

「帝国図書館の出現に渾身の努力、精力的な気魄を示し」（『八十年略史』）、論壇の雄三宅雪嶺から〝日本のパニッツイ〟と称えられたという田中稲城館長といえども、〝日本のパトナム〟（Herbert Putnam. 1899～1939 の間米国議会図書館長在任）〟にはなり得なかった。当初計画の四分の一というその建物には（前掲有泉論文附図など参照）、大正二年、十年と、若干の木造施設の増築がなされたが、数十万冊を擁する、同館としてはいずれも、「辛じて一時を糊塗」するに過ぎない。在任中、時にその公式報告の中にまで「館舎の狭隘、書庫増築の要」を切言しつつ―『文部省年報』参照―、大正十年十一月退官した田中稲城の「惜別会謝辞」（「図書館雑誌」四十八号 大正十一年）を読むとき、望んで容れられざるまゝ、さびしく去る者、敗者の言をそこに見出すことであった。

三

『帝国図書館沿革史案（第一次資料）』と題した未公刊の謄写刷二十三丁ばかりの資料（後掲。注(24)参照）を見ていくと、その「大正時代」項中、にわかに「十三年 新年度ヨリ図書ニ関スル相談部

新設」の記事を見出して驚ろかされる。その前後には、これを予測ないしは敷衍すると見るべき事項を発見できないからである。わずかに前記の「大正十年十一月田中稲城退官」のあと就任した松本喜一新館長（館長への正式就任は十二年一月）の打ち出した新施策、および大正十二年九月の関東大震災を契機として、災后、帝国図書館、東京市立日比谷図書館へと殺到して来た調査依頼の激増などがこの新措置の背景をなしたかと考えられる。

この大正十三年という歳は、偶然なことに、現在知られているいくつかの事例を示す文献から推測するに、わが国（公共）図書館レファレンス・ワーク史における輝かしい出発点のように思われる。何よりも、参考事務についての認識をはっきりと宣明した先駆的文献のいくつか――今沢慈海（日比谷図書館館頭）の「参考図書の使用法及び図書館における参考事務」、「市民生活の要素としての図書館」*が、また、今沢のもとで展開された参考事務〈後掲〉の実践報告ともいうべき小谷誠一「日比谷図書館に於ける参考事務」――が、相ついで「図書館雑誌」を飾ったのが実にこの大正十三年なのであった。

* 参考事務の史的回顧を試みる場合、この「参考図書の使用法……」（図書館雑誌　五五号　大正十三年三月）が先駆的文献として、もっともよく引かれているが、関東大震災に際会しての活潑な奉仕ぶりを記した次の「市民生活の要素としての……」という論文（同上　五八号　大正十三年六月）の方がより具体的に日比谷図書館における奉仕状況を記録している。なお、この論文には、「〝図書館はレクリエーション施設である〟ことを強調した先駆的文献」との評価もなされている（石井敦　公共図書館の百年「現代の図書館」六巻四号　昭和四三参照）。

参考事務の実践そのものにおいても、この前後一、二年の間、都市図書館におけるいくつかの試み*が発見できる。

大正初期、すでに東京の日比谷図書館以上に蔵書数の多き（六万五千冊）を誇った岡山県立図書館では、「本の選らびかたの相談を主としたレファレンスセンターとして、岡山県図書相談所を、大正十二年十一月二十日県立図書館の一階に設けた」[15]という（『岡山県立図書館六十年史』昭和四二）。

さらに、大正十四年には、日比谷図書館においては「五月以来、案内係として一人の専任係員を目録室に常勤せしめ」たと小谷誠一が報告している…図書館に於ける参考事務（「図書館雑誌」七八号　大正十五）や「市立図書館と事業」の記事による。ただし、大正四、五年頃から図書調査係が置かれたとも記されている（昭和三四年東京都立日比谷図書館編刊『五十年紀要』をも参照）。

市立名古屋図書館（館長は以後ながい間阪谷俊作が務める――彼はのち、戦後創設の国立国会図書館で、一般公衆への閲覧参考事務担当の部長となる）においても、開館二年目に当る大正十四年十一月から、目録係が読書相談を兼務の形で始めたと報告している。[16]

これらの事例につき、なぜか、後年の公共図書館界では、各館みずからがその光輝ある歴史を忘れるか、あるいはその年次においても誤認のままに記録されているが、[17]――ともあれ、これ以降昭和初頭にかけて、たとえそれは「部分的なもので、一種の試験的事業の境域を脱し得な」かったと評される[18]態のものにもせよ、当時すでに、「参考事務の核心」について、「文献を離れて存在し得ないもので」あり、文献目録の作成は図書館員の重大な使命の一つ」（波多野賢一）[19]と、その概念が立派に把握されていたのであった。

＊　このほか、新潟県立の例もあり（前掲名古屋の報告〈注16参照〉に言及されている）、神戸市立の場合は大正末期開始とされていることもよく知られている。また、すでに大正五―六年において〝質問応答規定〟を定めていたという伝統をもつ京都府立図書館の場合は―やや後年になるが―昭和六～七年頃には参考事務に人を得ぬため、館長みずからが日曜日にも出勤して来館者に応接し、たまたまそこへ見学に来た図書館講習所生を感激させている（下内矢之助：目録案内係設置の必要「学友会雑誌」三号）。かように、この期の参考事務が、ほぼ大都市（府県立図書館所在の市）図書館の所産である点は、今次大戦後におけるレファレンス業務の発展過程にも通ずるものとして注目されよう。

大正末期、諸図書館におけるこうした参考事務の開花こそ、この時代すなわち大正デモクラシーの所産である〝知識の大衆化〟のもたらした成果とみることができようか。この時期の文化的事象をいくつか追ってみても、たとえば、新聞社週刊誌の創刊（大正十一年）、ラジオ放送の出現（同十三―十四年）などに見るごとき、いわば〝大衆文化の時代〟ともいうべき新時代の到来が告げられている。地味きわまりない図書館界においてすら、ようやく、田中敬『図書学概論』（十三年富山房）――田中にはこれより先『図書館教育』の著もあるが（大正七年）――、間宮不二雄『図書館辞典』（十四年文友堂書店）などの今なお古典的名著と顧みられている成果があいついでこの頃に出版されている。あるいは、現在なお、戦前事情の調査のための文献検索には便宜の得られる『研究調査　参考文献総覧』*（弥吉光長との共編　昭和九）の母型をなすともいうべき「参考書の栞」が、参考事務のパイオニア波多野賢一によって世に問われたのも実に大正十三―四年（「図書館研究」に連載）であった。

＊本書附録に『参考事務（読書相談）概略』がまとめてあることも逸することができない。

四

近時、「図書館近代化の闘魂」と評価された人（注19参照）、波多野賢一は、大正十年文部省の図書館教習所（のちの図書館職員講習所）に入ったが、それ以前すでに台湾において、太田為三郎の厳しい薫陶を受けたという（同上　注(19)参照）。その太田為三郎は人も知るごとく、それより以前、長く帝国図書館にあって田中稲城を助け、また日本文庫協会（のちの日本図書館協会）の運営にも力をいたし、またこの頃には、波多野を第一回生とする図書館職員講習所の教壇に立って、司書の教育にもながく携わった。前述の田中、今沢さらには東京帝国大学の和田万吉とともに、わが国近代図書館のパイオニア的存在であることはいまさら論ずるまでもない。館界以外に人文学界においても、その名は、不朽の名編『日本随筆索引』によって広くながく学徒の記憶に留まっていよう。和田万吉が、その初版（明治三四年）の序に「曩に本邦の随筆索引の編纂を企て……三閲年、業を竣へて之を図書館に献じ、以て登覧者の繙閲に供えたり」（ルビは引用者による）と記しているように、*その編述は実に、今日的表現をもってすれば「自館作成のレファレンス・トゥール」（補助トゥールと称される）の開拓者であったといえよう。さればこそ、彼は、早くも第七回全国図書館員大会において、「図書館は一の営業なり」と説き、米国の例を引いて、〝図書指導掛〟（レフェレンス・ライブラリアンとルビが付されている）の存在を知らしめ自ら実践したことであった。――明治四十五年五月二

十七日講演。注(9)参照――。またただに江戸末期随筆類の検索トウールのみならず、帝国地名の辞典、あるいは、医事雑誌の索引編さん――近時の研究にしたがえば、必ずしもわが国雑誌索引の鼻祖ではないが、(拙稿「勧業諸表標目」〈稀本あれこれ〉国立国会図書館月報 四十九号 昭和四十年四月号参照)――など、人に抽んでて「研究心に富み」、「学識ありて」「且つ其の館〔帝国図書館〕に永く在勤せること」等々、その知友、和田万吉が Reference Librarian に必要な資格として挙げた諸条件をことごとく満ち備えていたにかかわらず、彼(太田)はその多くの識見を帝国図書館ではなお充分に発揮せず、その抱くところの図書館の理想像を台湾に、あるいは外国学術文献の豊富な研究的図書館〔東京商大〕の建設、充実に注いでしまったようである。上野の杜に彼の教えを受けた人々の幾人かによって、戦前期図書館史を飾る参考事務上の業績が残されたのも、多くは専門機関かあるいは満・鮮、台湾等の新興図書館においてであって、その多くが〝帝国図書館何するものぞ〟との気概に燃えていたのも皮肉であった。

(20)

* すでに、『帝国図書館一覧』(明治三四年二月刊)の当該説明に「本館員太田為三郎カ公務ノ餘暇ヲ以テ……編纂シタルモノナリ」と明らかにされている。

五

今日、当館(参考書誌部)のそこここに、忘れられたように残置されているカード目録とともに、いくつかのいわゆる〝補助トウール〟の先駆とも呼ぶべき(本稿冒頭に「数少ない業務記録」と記した)ものがあり、いずれも以下紹介する『読書相談ノ近況』と同時代すなわち昭和十年代の所産が多い。たとえば、蔵書にもくり入れられている、『肖像索引』(R281.038 TE24ウ)には昭和十四年二月に製本の印が捺され、そのはしがきに記すように「国定ローマ字順」「訓令式をいう」に編成された内容〔所収書〕からみても、あきらかにこの時期の作成であろう。

例「藤井善助 近江商人事績写真帖 下 (八六)」のごとく記載され、採取した図書『近江商人事績写真帖』〔昭和五刊〕を、この『肖像索引』の巻首に掲げられた、五十三点の所収資料名のなかに見出して、その函架番号を知り得る方法*をとる。

* 印刷カードなど用いることなく、少ない労力で効果的にこの種書目を編さんする場合は、こうした一定の記載省略方法を採用することは、戦前期の諸書目・索引類によく見受けられる。

たとえば、波多野賢一か、あるいは彼の指導によった作業とおぼしい東京市立駿河台図書館の『人名調査資料』(調査資料第三。―その第一、二は昭和九刊― 昭和十 二五頁)では、つぎのような構成をとる。

巻首に所収書目を九門に分け、記載は「六門大東 大東京年鑑(昭一〇)中村舜二編 〇〇〇―五三〔駿河台図書館の請求記号〕」となり、本文では主題別に分けた「財政」の中に、〔東京府多額納税者〕(六・大東六八九)と記す。即ち、巻首の「六 大東」―書名「大東京年鑑」の略名―を「瞥見すれば、直ちに其全書名・編著者名・本館に於ける其図書請求番号等を、確知することを得」(凡例)としている。

あるいは、『記念論文集目録』と題して、見るからに古さびた、帝国図書館館名入り両面一〇二丁を綴じた(「〔昭和〕十・十二」と製本済を示すらしい捺印がある)四六判の小さな冊子は、天野敬太郎の「記念論文集に就いて」(雑誌『書物展望』に連載。昭和七～十)にでも誘発されたものか、蔵書中、昭和十二年ころまでに刊行の各

種の論文集（古稀、退官記念など）を多く採録し、その他にも著名な学者教育者の伝記集など――たとえば「仁科節編　成瀬先生伝（桜楓会　昭和元）　五七七―六四〈請求記号〉」にも及んでいる。

これらにくらべれば、さらに古色蒼然としている、大判の三十冊程にもなろうか、『史籍細目』『増加叢書細目』『記録細目』など、毛筆で丹念に書きつらねられ、明治三十年代の館印も捺された細目集録もある。これらが、前に記した太田為三郎の初稿「随筆索引」（七冊）と並らんで出納所の卓上に置かれ、利用されていた状況*は、あたかも、それは初期の件名目録が、館員個人の編さんから出発したといわれている往年の大英博物館での光景とも相通ずるものといえようか。

* 明治二十九年二月、田中稲城の意を汲み議会で「帝国図書館ヲ設立スルノ建議案」の説明をした外山正一は、その中で（新設さるべき）帝国図書館の事業の一つとして、「日本の書物に欠けている、看出しの便利なるものを拵らえる必要」を力説している（『八十年略史』九七頁参照。）

ただし、こうした用意はすでに東京図書館時代にも見られ成果をあげていた。――田中が帰朝後、新鋭の館長として腕をふるい、太田らまたその下に在ってこれを助けた二十年代後半において、――明治二八年版の『東京図書館一覧』の「目録案内――和漢書ノ部」の項に、「類書、叢書幷ニ大部ノ図書ノ明細目録アリ其閲覧ヲ望ム者ハ出納所ニ申出アルベシ」と記し、前掲の諸細目を掲げている。さらに、このことは明治三十四年の『帝国図書館一覧』にも見られるばかりでなく〈そこに、「随筆索引」の案内として前掲の「館員太田為三郎：」云々の説明もなされている〉、三十六年刊の『帝国図書館和漢図書書名目録　第二編』においても、たとえば「史籍集覧〔一八三冊〕」の項に「細目ハ楼上出納所ニ就テ見ルベシ」となっているという（閲覧部坂下精一司書示教）。

六

太田為三郎の労編になる『日本随筆索引』を要したごとく、あまりにも多く産出され過ぎた江戸期雑抄随筆の弊を説いた柳田国男が、一転してかつてみずから偶目したプリンストン大学図書館における周到なサービスぶりに言及し、さらに「向方では本の索引がずうつと出来てゐるが、日本の図書館にはそれがない…。上野の図書館などに行くと、自分の体がかくれるほど本を積みあげてゐる人がある」と説いたのは昭和二年であった。[21] この年から、かねて懸案であった第二期拡張工事に着手した帝国図書館では、五年三月これを完成。「新館ノ増築ニヨッテ、閲覧室ハ坐席四百五十有余ヲ加ヘ、全定員千有余席ヲ算スルニ至リマシタガ…、殺到スル読書子ノ為メニ、忽チ満員ヲ告ゲ閲覧室ノ拡張ハ引続キ当局ノ御配慮ヲ願ハザルヲ得ナイ……且ツ、図書館ノ心臓トモ謂フベキ書庫ハ、全ク収容ノ余地ナク、蔵書約七十万冊中ノ、二十有余万冊ハ、何等ノ防火設備ナキ木造仮書庫中ニ蔵スルノ余儀ナキ情況*ニ置カルヽモノデ」[22] あったが、これより、昭和七年～九年にかけては自動複写機の装置（後述参照）、製本室（製本係）等を新設、そして九年には「相談係ヲ拡充シ（圏点は引用者による）文書相談ノ回答ヲ活溌ナラシム」[23] に至った。

* 昭和九年には九州の実業家安川清三郎の寄附による書庫（木造延百坪）が附置され、それまで、書庫狭隘のため止むなく、閲覧室のスペースを占めていた多数の蔵書をそこに収納し得て、閲覧室に余裕を生ずるようになった（『八十年略史』参照）。

昭和十七年春、忍び寄る大戦の災禍、来るべき〝帝国〟日本の破局を予知する由もなく、緒戦の勝利に酔うていた時期に編まれた

とおぼしい[24]『帝国図書館沿革史案（第一次資料）』（以下『沿革史案』と略記する）には、同館でのこれら昭和期初頭の新施策を総括して、「諸係を新設或は拡充して館勢大いに整ふ」と標記している（昭和時代㈣――昭和六年の項）。事実、松本館長は、就任五、六年にして、「大英断を以て」「生き辞引的存在であった二三の長老連」の退隠を求め[25]、「職員の年令をずっと若返らせ」、かつ「官制改正　司書十一人ヲ十六人ニ改」[26]めた。また、前掲のように懸案の書庫増築を実現したのみでなく、多年、名物視されていた入館者の行列に対して、親切に呼びかけるスピーカーを新設して館界の話題となるような（昭和三年三月「図書館雑誌」の報道）設備の改善・サービスの向上も行なった。さらに、館長自身、出でては、図書館協会を主宰し、昭和六年四月二日には〝図書館ノ使命〟と題する「御進講ヲ奉仕」[27]し、館の蔵書また「屢々乙夜ノ覧ニ供」[28]せられたことを光栄とした―このことを記念して館界では、「図書館デー（のち図書館記念日）」が設けられる―。彼自身はこれらの栄誉に感激しつつも、「（帝国図書館の）建築を完成させるには約六百万円を要する……現在の帝国図書館は……欧米諸国に比すれば勿論のこと……北京にある中華民国の国立図書館にも及ばざる……対外的には一大国辱たる[29]を痛感」したにもせよ、その〝貧弱なる帝国図書館〟を利用した知識人からは、「上野の館長さんの室は勅任官の筈*だから、キット形勝の場所にあるだらう」とひがまれ[30]、一方では、館員にとって「便所で一寸すれちがうくらいで、言葉もかけられなかった。まさに図書館の天皇のごとき存在」[31]と回顧されるような時代であった。

＊戦前期の官庁機構としては当然とはいえ、当時の帝国図書館では、たとえば「「出納手と監督」は傭、出納職員は雇員、係長は判任、部長は奏任、館長も奏任（後に勅任）」、という「身分制」と「完全な徒弟制度」が、図書館業務の心臓部というべき閲覧（出納）業務を支えていた（前掲『上野図書館の経験を語る』参照）。

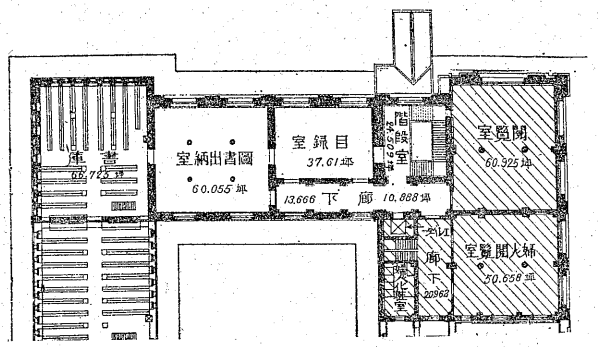
「館勢大いに整ふ」と記された『沿革史案』〔年表〕を繰っていくとなお、「学位請求論文　文部省より移管せられたるを機とし蒐書次第に専門化す」（十一年の項）とか、「特別研究室ヲ設ク」（五年）のほか、「印刷所ヲ特設　カード印刷ヲ始ム」（十四年一月）や永年懸案の書名目録のほか、「件名標目表ヲ刊行」（十三年）等々、内部体制の充実が目立ってくる。大正期以降、閲覧傾向の指数において最高を示していた第六門（数学・理学・医学）が、第三門（文学・語学）に替わられる[32]といった、大正から昭和初年のかもし出す平和的ムードを象徴した時代相も、やがて一変する。日華事変の勃発（昭和十二年七月）による時代の要請は、「閲覧人数減ズ」るも、ふたたび「産業工学門タル第七門ノ進出メザマシク遂ニ三門ヲ超シテ第一位ニ上ル」という閲覧傾向の変貌（同上『沿革史案』による）を告げる。〝時局の要請に役立つ図書館〟たるべく――これは田中前館長の宿論でもあった―　昭和十二年以降、数冊に及ぶ『時局に関する図書目録』を逐次刊行したのも、すでに昭和八年の図書館令以降〝思想をスポイルされた〟（石井敦「公共図書館の百年」の表現）館界のリーダアとしては当然歩まねばならない道であった。「館勢」を「大いに整えて、さらに、「閲覧規則を改正し、学術参考図書館としての方途」を定め――昭和十六年十一月、入館者年齢を（十五才から）二十才以上に引上げ[33]――たが、時すでに〝時局の要請〟は図書館の上を素通りしていた。館界においても、唯一の国

立＝中央図書館への期待はおろか、逆に「帝国図書館の過去及び将来」と題した痛烈な批判を浴び（竹林熊彦　図書館雑誌　三十五年一、二号　昭和十六年）、ついには、同じく館界の指導層によって、時局下、〝図書館制度の全般的改革案〟の名のもとに、「帝国図書館ヲ拡充整備シテ国家経倫ノ企画調査、学問技術ノ調査研究ノ最高機関タラシムル」改革の必要が力説されるにまで及んだ。[34] さらには帝国図書館における参考事務について、現在、われわれが手にすることのできる唯一の報告ともいうべき大田栄太郎の「図書館と調査部」（図書館雑誌　三十五年六号　昭和十六　後掲参照）とまったく同時期に、[35] その帝国図書館を否定した中央大図書館の設立計画とも読み取れる〝文献図書館創設案〟[36] という勇ましい構想が発表される始末であったのだから。[37]

七

当然のことながら、この時期にまたがる十余年、≪昭和十年代前後≫については、〝歴史の証言者〟も多く、[38] 記述に事欠かぬ筈である。ただし、こと参考事務に関しては、直接その衝に当っておられた方で、現在も当館に籍を置かれる人は無く、その名を伝えられる若干の経験者はいずれも館界の外に去っておられる。誰から某へとそのつぎ目についても明らかでない、当時の参考事務の担い手につきその頃、他の業務に従事した方々（参考事務にもっとも近いところで書庫担当の事務を所掌しておられた人々を含めて）から聞き得たところを、かろうじてまとめると、下記の如き状況が描き出されようか。

「昭和期の前半にあっては、鹿島則泰司書、植野喜代作司書の二人に、婦人係員一名がついて従事していた。／植野司書は大正年代から閲覧事務に従事していたのでその経験から、（主題別排架でない）蔵書の検索、利用案内にかなり精通していた。／植野さんの得手でない古書や古記録の調査となると、これは鹿島老の独壇場。当時、植野司書の卓上にベルが備付けられてあり、用が生ずるとこれを押す。すると、（奥から）鹿島さんが出てくるという寸法。／館内で当時「鹿島さんのベル」と呼んだものである（もっとも、鹿島老は古風な方でもあり、その出退庁も通常よりは緩やかであられたから「嘱託の身分であられた」そう毎回のように尋ねるということは無い。無闇につまらぬ質問はしなかった—大田栄太郎氏談）。／婦人の係員といっても、講習所出でかなり練達していた人であったが、割と短年月で辞められた。が、よく仕込まれていて古いこともよく知っていた。[39] ／植野さんは写真係（複写）が設けられると、それも担当した。（今とちがって、当時は）撮影すべき図版をさがすこともその〈参考事務〉仕事であった。書庫内の本を探し歩き、利用者の注文にふさわしい図柄を見付けて「あったよ〳〵」と嬉しそうに示されたことも何回か出会った。レファレンスと複写が直結しているんだから、これ程確実なことはない（写真の機械は、ジーメンス社製なので第二次欧州大戦の進展にともない部品が欠乏して使われなくなったようであった）。／（鹿島さんも逝くなり、植野さんも辞めた）いわば後期の参考事務では、大田栄太郎、[40] 吉川尚、玉井藤吉（書記を兼ねる）の各司書が担当したようだ（後掲「読書相談ノ近況」はどうもこの人たちの手蹟のようだ）。／参考台のそば—〈出納台のわき〉に、会社や団体の名鑑類をズラリとならべて、大田さんが質問に応じ



昭和初期の帝国図書館（二階―右側斜線部分が昭和二―五年の増築部分）
＜帝国図書館平面図より＞

ていた風景などが思い出される。／職員は全部で一五〇人前後か。(41) ―出納台に出ていると、〝高い所からにらみ付けている〟とか評判も悪かったが、―〝お客さん〟（閲覧者）と応待する所が数カ所にすぎない館内では、たらい廻しなど出来る余地が無い。けっこう、少ない人数で誠実にやっていたのではないだろうか。

八

さきに〝われわれが手にすることのできる帝国図書館における参考事務の唯一の報告〟と記したのは、実にその一人、大田栄太郎司書によってまとめられたものである。さいわい「図書館雑誌」に発表されたものなので、館界大方の繙読にはこと欠かないと思われるし、そこで主張されている論旨も、日華事変から太平洋戦争へと移行する〝挙国一致〟の戦時体制下での、私見による立論であるが*、これを要約略記すれば下記のとおりである。

＊これより以前、同じ「図書館雑誌」に、「専門図書館への試論」をも発表している（「図書館雑誌」三十四年十二号　昭和十五年）

＜大田栄太郎「図書館と調査部」要旨＞（（　）は引用者注）

帝国図書館における文書質問の体験から、

照会事項はつぎの三種に整理できる。すなわち、

1. 書名による質問・照会――「源氏物語」の異本・偽書の所蔵有無の類
2. 主題による質問・照会――校正、珠算、簿記の参考書を求むるの類
3. 著者による質問・照会――露伴の作品の批評を読みたいの類……この型の質問の方が、前項より多い。

のごとくである。

質問者（利用者）の資料探求の意欲はさかんであり、帝国図書館に二十余年も通っている著名な学者でも、なお読書相談係を利用している。したがって、（相談係にとって）利用者の質問は、誠心誠意あくまでも自己の研究として、恩師の命令としてその研究調査の援助をはかるべきであろう。〔圏点引用者〕

読者相談（調査）の十全を期すには、つぎの如き準備体制が望まれる。

1. 予備調査〔のために、準備し、精通し置くべき図書。以下同じ〕

第一類図書（準備行動の資料）

(1)辞典・事彙類　(2)索引〔語句、文献の索引とも〕(3)年表、系譜類

第二類図書（多少程度の高い基本資料となるもの）

(1)名簿類　(2)年鑑　(3)歴史書・伝記書類〈各主題の学(説)史を含む〉　(4)還暦、在職記念論文集、追悼文集　(5)地理書・地図

(6)統計書類　(7)一覧、要覧　概要

2. 文献目録調査（既往の斯学の文献を探知すること）

(1)図書中のもの　(2)雑誌中のもの――各雑誌の内容細目

(3)年鑑中のもの　(4)展覧会〔目録〕　(3)図書館、文庫目録

3. 基礎調査

主題の下に調査研究されてある原拠的図書・記録を基本資料（仮称）といひ、その文献なるものを洗いざらい発見記載して、一朝の際に役立たしむべく努める行為が此の基礎調査である。

(1)合綴もの中（二、三主題以上同一綴の内に含まれ背文字に出ないもの）の資料を把握しておく必要……たとえば、琉球の稀覯書といわれる「混効験集」は、『国語学大系』に収録されて知られたが、すでに、伊波普猷の『古琉球』に採録されていることを知るべきである。

(2)合輯のものの、資料の把握の要……たとえば、和辻哲郎の『日本精神史研究』なる論文集を分析するならば、そこに、「沙門道元……推古天平時代美術の様式」のごとく多種多様な論考を知り得る。

(3)同名異種（同一書名異書）の調査

(4)異名同種（書名を異にするも同一内容の書）

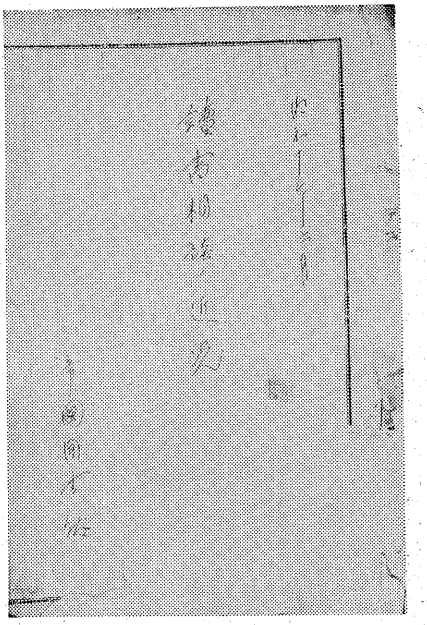
出版書肆の営業策によって生ずるこの種の事例〔同一紙型を用い書名のみつけ替えて新刊をよそおうの類〕を把握しておけば、いたずらに無用の文献提供を防ぐことができる。

函号

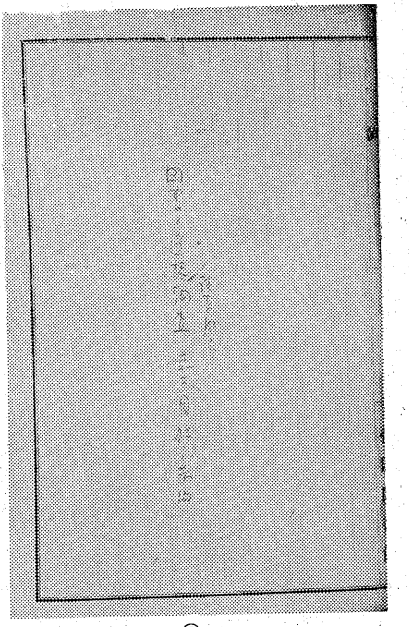
									本館所蔵	自（　年）至（　年）	
		著編	調査者・訳註者 担任者・其他								発行
昭和　年　月刊	版	刊	装	冊	頁	索引（　）・図版・地図・統計	円				
収録範囲											
内容											
備考											

(5)翻訳書の調査

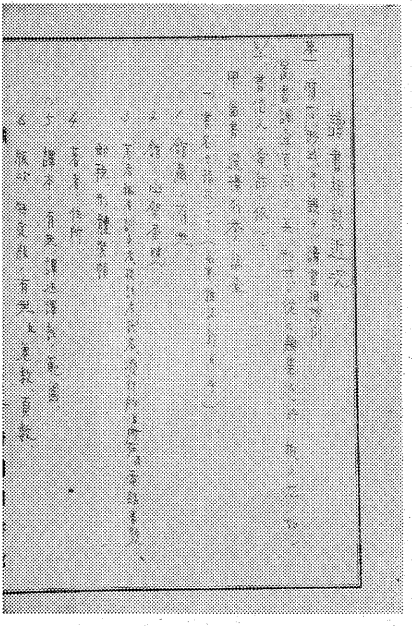
このような、充分な調査を果すために、通常の目録以外に、目録係で採録されないものについて、目録係と協議の上（圏点引用者）、調査目録作成の必要を説き、「索引、年表、図版、地図等の有無、採録範囲」などの欄を設けたカードの記入様式を紹介する（上図参照）。すなわち〝図書館における調査部〟とは、「受入～閲覧、貸出など（従来の業務体制）を縦とするに対し、調査部は横に交叉するもの」として、その機能は、戦後の図書館奉仕論においては常識化している、図書館の相互協力、P.Rなどいわゆる



①



②



③

資料　『読書相談ノ近況』

①表紙。右下は破れている。

②見返し。「図書ノ選択（読書ニ関スル）調査並ニ目録ノ案内」と記す。（鉛筆書き）

③本文第一丁はじめ。

Libray Extension に及ぶべきことを説いたのが、大田栄太郎の立論である。

九

以上で、戦前期、帝国図書館での参考調査事務の背景につき、非常に粗いタッチで略説してみた。帝国図書館館制（明治三十年四月二二日 勅令百十号）のほかは、事務分掌はおおむね館長の裁量（専行）によって定めることが許されていた――注(4)参照―当時につき、これ以上、前述のごとき資料操作法によって求めることは徒労のようである。部分的に知られているその蔵書史、何人かの先輩によりまとめられている目録編纂史[42]をも含めて、帝国（国立）図書館史を本格的にまとめることが、これからの図書館人いや当館に課せられた責務のようである。また帝国図書館内に設けられていた図書館職員養成所の歴史も、技術教育の歴史としてだけではなく、帝国図書館を形成した人々の考え方、その図書館観を知る上でも必要であろう。そこで、昭和十七年（第二十二期）の講義にはじめて設けられたという[43]「図書館参考事務」の内容を知ること（講師は林繁三帝国図書館司書官）も興味ふかい今後の課題といえよう。

十

以下、つぎに翻刻する『読書相談ノ近況』の書誌的事項について略記する。

帝国図書館名入り、青色罫紙（片面十三行。二七×一九・五cm）を使用。表紙とも十九丁、ペン書き。本文は、箇条書に記載したあとへ、適宜、類縁の項目を―各項下、時には行間に―加筆（別筆）している。翻刻に当っては、項目（八門分類の一門）ごとに改頁されているのを改めて、各項目内は追いこみとし、別筆と思われる下段の加筆部分は（ ）印で包んで区別する。したがって、原文で（ ）を用いた個処は＜ ＞に改めた。ただし、原型を示すため、最初の第一項の部分（「質問形式ヨリ観タル読書相談例」の三丁）は、追いこみとせずそのまま転記した。なお、表紙、見返し（図書ノ選択…

6月閲覧人員并貸附図書冊数　開館日数29日

	種別	普通	特別	館外帯出	合計
閲覧人員	1日平均	32,487	11,680	150	44,317
		1,120.2	402.8	5.2	1,528.2
貸附図書冊数		和漢書	洋書	合計	百分比例
	第1門 神書 宗教	2,296	8	2,304	2.6
	第2門 哲学 教育	5,914	118	6,032	6.7
	第3門 文学 語学	18,517	1,963	20,480	22.6
	第4門 歴史 伝記 地誌	11,677	144	11,821	13.0
	第5門 国家 法律 経済 社会 統計	11,680	184	11,864	13.1
	第6門 数学 理学 医学	12,459	439	12,898	14.2
	第7門 工学 兵事 芸術 産業	16,265	523	16,788	18.5
	第8門 雑誌 叢書 雑筆	8,103	361	8,464	9.3
	合計	86,911	3,740	90,651	100.0
	1日平均	2,996・9	129・0	3,125・9	1人平均2.0

昭和10年6月の閲覧統計〈「帝国図書館報（28冊第6号）掲載〉

の字句)は、本文と異なった手蹟である。

通覧して判るように、冒頭の〝参考質問 (Reference question)〟の形式による分け方〟は、きわめて常識的な方式によっているが、その大別――「書名ヲ指示シテ」などとある項――が、前掲の大田栄太郎「図書館と調査部」において整理されている三つのパターン(〝質問照会の種類〟)にも通じている点興味深い。

なお、この記録のまとめられた(表紙記載の)昭和十年六月中における帝国図書館の閲覧統計を、当時の「帝国図書館報」から上記に転載して、いささか当時の利用状況を推察するよすがとした。

あとがき

戦前はおろか、戦後の旧上野図書館時代にも何等かかわりなき筆者のごとき者が、おこがましくもかかる略説小考をまとめるには、資料、経験談の提供を通じて、元館長・国立国会図書館司書監岡田温氏(現東洋大学教授)、石黒宗吉閲覧部司書監ほか旧職員各位のご指導助言をあおぐこと多いものがあった。また、全く偶然なことに、この稿脱稿後しばらくして、たまたま所用で上京された大田栄太郎氏(富山県文化財専門委員)にお会いできたことは石黒司書監のご配慮によるものである。大田さんに伺ったお話は、短い時間であったし、別にまとめた方がよいように見受けられるので他日を期することとし、文中では、他の方々の回顧に交えて、わずかな補正を試みるにとどめた。なお、さらに偶然が重なって、長沢雅男氏の紹介により、「明治・大正期におけるレファレンス・ワークの発展」の筆者北原圀彦氏(町田市立図書館司書)の訪問を受け、その抜刷をいち早く頂いたのは本初稿の校正が始まろうとする直前であった。北原氏とは初対面にかかわらずお互いの研究談で多年の知己の如き思いを交した。氏がその母校の機関誌(「Library and Information science」八号 昭和四五)に寄せた論考は、筆者には若干の異見を抱く個処も見受けられるにせよ今後この種の論究をすすめる際の必読文献であり、本稿と併読されることを望みたい。

(昭和四十五年九月末記。十二月初追記)

(いなむら・てつげん 参考書誌部索引課主査)

注・引用文献〈( )内に出典の書誌的事項を記す〉

(1) 国立国会図書館は、その館法の規定するところにしたがえば、行政司法の各部門に設けられた支部図書館をも含めて構成される。よって、その支部図書館を含まない〝本館〟を、中央館と称して来た。

(2) 昭和二十四年、国立図書館の統合により、支部上野図書館が発足するに際し、はじめて、「参考課」と課制をとる単位として発足。のち、機構改革にともない、新館への移転にかなり先立って、一般考査部考査書誌課に統合された――『国立国会図書館年報』参照。

(3) 『上野図書館八十年略史』(国立国会図書館支部上野図書館編・刊。昭和二八 アンケート集とも二冊より成る)

(4) 「帝国図書館長職務規程」(大正二年六月二十三日 文部省訓令号外)によれば、つぎのように規定されていた。

第三条 左ノ事項ハ館長之ヲ専行スベシ

第一 事務ノ分課及職員ノ事務担任ヲ定ムルコト

第二 規則ノ施行上必要ナル細則ヲ定ムルコト

〔下略〕

(天野敬太郎 森清編『図書館総覧』昭和一三 一五八頁参照)および(文部省『社会教育関係法規』昭和十五)など。

(5) 最近の文献でも、戦前期には全く不毛であったかの如き誤った論の

少なくないことを北原圀彦が指摘している（本稿「あとがき」参照）。

（6）次項（7）に示す、先駆的事例を引用しつつ、レファレンス・ワークのあゆみを回顧したものにつぎの論説があり、参考となった。

三宅千代二　日本に於ける参考事務とその文献（図書館界　三巻三号　昭和二七）

北島武彦　レファレンス・ワーク＜文献の手引＞（図書館雑誌　五十三巻六号　昭和三四）

武居権内『日本図書館学史序説』＜とくに二九四―二九八頁参照＞　昭和三五

丸山　信　わが国におけるレファレンス・サーヴィス研究略史――私立大学図書館を中心として（私立大学図書館協会会報　四十一号　昭和三九）

（7）今沢慈海　参考図書の使用法及び図書館に於ける参考事務（図書館雑誌　五十五号　大正十三）

小谷誠一　日比谷図書館に於ける参考事務（図書館雑誌　五十五号　大正十三）

小谷誠一、図書館における参考事務（図書館雑誌　七十八号　大正十五）

波多野賢一　図書館における参考事務（図書館雑誌　一一〇号　昭和四）

渋谷国忠　参考事務要論（図書館雑誌　三十三年一、二号　昭和十四）

（8）『図書館管理法』（文部省より刊行。明治三三年初版、同四五年改訂版）

――引用の個所は改訂版より、石井敦「公共図書館の百年」（現代の図書館　六巻四号　昭和四三）の所説から再録。このほか同書中にはレファレンスブックにつき「読ムニ非ル一種ノ書籍」と紹介もしている。本書は帝国図書館長田中稲城の執筆で、西村竹間の「田中稲城先生略事歴」（図書館雑誌　二十一年二号　昭和二）によれば、〝図書館管理法なる一書を著述出版し図書館員をして船に櫓を得たる感あらしめ〟云々とされた。

（9）太田為三郎「図書館は一の営業なり」（図書館雑誌　十五号　明治四五）。北原圀彦によれば（「あとがき」参照）、これは「知識の上の啓蒙による誤解である」という。

太田為三郎は明治二十二年以来、田中稲城館長の下に、東京＝帝国図書館の司書をつとめた。「図書館雑誌」三十六年三号（昭和十七）に波多野賢一＜太田為三郎先生伝＞がある。

（10）阪本四方太＜当時、東京帝国大学図書館司書＞「図書館の急務」（図書館雑誌　八号　明治四三）――長沢『参考調査活動序講』にも引用。

（11）帝国図書館官制第一条（明治三十年四月二十二日勅令第百十号）。この字句は、これより先、明治二十四年七月改正の東京図書館官制と変りないが、帝国図書館史研究の先駆者故竹林熊彦の指摘によれば、東京図書館官制は、はじめ「文部大臣ノ管理ニ属シ、各種ノ図書ヲ蒐集保存シ及閲覧参考ノ用ニ供スル所トス」とあったのを（明治二十二年三月一日勅令二十一号）、「内外古今ノ……」と改めたところに、館長田中稲城の〝理想と抱負とが表現された〟とみられる（竹林熊彦『近世日本文庫史』昭和一八）。

なお、一般の図書館についてはつぎの如く定義されてきた。

「図書館ハ図書ヲ蒐集シ公衆ノ閲覧ニ供スルヲ以テ目的トシ」（図書館令や文部省年報の表現）。

「図書館ハ図書記録ノ類ヲ蒐集シテ公衆ノ閲覧ニ供シ其ノ教養及学術研究ニ資スルヲ以テ目的トス」（昭和八年七月勅令第七十五号「図書館令」第一条）。

（12）『上野図書館八十年略史』の引用による〔一部訂正〕。

（13）本誌第一号　有泉貞夫「田中稲城と帝国図書館の設立」の十七頁

に紹介の牧野文書中「帝国図書館設立ノ議 第五 官制の項」の記載〈明治二十九年初〔帝国議会建議の時に当る〕成稿と推定〉参照。

(14) 竹林熊彦編「田中稲城著作集〈㈢七理想の書目〉〔明治四十二年五月、南葵文庫における談話〕」(図書館雑誌 三十六年九号 昭和十七)

(15) 山県二雄『おかやま図書館ものがたり』昭和三八(同年の全国図書館大会で、配布のパンフレット〔金光図書館報「土」七八号 昭和三八と同文〕)には、「大正十三年十一月から」と記録。なお山県は昭和初年、自分が、県立図書館員となった頃を回顧して、『六十年史』巻末の「回想編」において、「其処にはいつも人がいなかった」とも云っている。

(16) 塚本勝雄 市立名古屋図書館の読書相談(図書館雑誌 二十二年十二号 昭和三)

(17) 昭和三十一年七月現在で、図書館職員養成所レファレンス研究グループが調査作成した「参考事務に関する調査—公共図書館—」というアンケート結果(北島武彦教官指導)では、参考事務の開始年月*について本稿中に記されたいくつかの事例とは合致しない。

* 質問第二項抜すい

調査依頼先 二一八館中回答一七六館(県立九〇・七、市立七八・三%)

2. それを〔参考事務を〕いつから始められましたか

	県立(%)	市立(%)	区立(%)	町立(%)	村立(%)	私立(%)	計(%)
明治三七							
大正二	一(二、三)					一(一一、一)	(一〇、七)
一五						一(一四、三)	(一〇、七)
昭和二						(一四、二)	(一〇、七)
五						(一一四、三)	(一〇、七)
一〇	二(三、五)						(二一、四)
一三						一(一六、七)	(一〇、七)
一五						(一四、二)	(一〇、七)

(国立国会図書館一般考査部『レファレンス・ワーク連絡協議会議事録』昭和三十二年 添付資料〈謄写刷〉より再録)

(18) 毛利宮彦 参考事務の組織と実際——我国図書館の現状(『図書の整理と運用の研究』所収 昭和十一)

(19) 波多野賢一 図書館における参考事務〈昭和三年図書館大会発表〉(図書館雑誌 一一〇号 昭和四)——小井沢正雄「図書館近代化の闘魂」〈武田虎之助先生古稀記念論文集『図書館と社会』昭和四五 所収〉の要約による。

(20) 和田万吉「公衆本位の図書館に就いて」〈大正十年二月講演〉(図書館雑誌 四十五号〈雑録欄〉 大正一〇)による。

(21) 柳田国男 読書懺悔(〈全人〉 昭和二年に発表〈のち『退読書歴』昭八所収〉。定本『柳田国男集』 第二三巻に収録)

(22) 松本喜一帝国図書館長の増築落成式式辞——『上野図書館八十年略史』の引用による。

(23) 『帝国図書館沿革史案(第一次資料)』十八頁。別に三宅千代二の文には〈注(6)参照〉、「昭和の初め頃、……出納室の片隅に〝読書相談〟の看板をあげたコーナーが設けられて、専任の係員が…質問に答えていた」ともある。

(24) 『帝国図書館沿革史案(第一次資料)』。本文二十一丁 謄写刷(岡田温氏蔵)。文中に、「昭和十七年 書名目録 第五編刊行」「昭和十七年四月一日現在現況」の字句が見え、もって、この資料編さんの時期が判る。本稿には、記載は片仮名、平仮名をいずれも混用のまゝ原文により引用した。

(25) いずれも、岡田温「松本先生を思う」(図書館雑誌 四〇巻二号 昭和二一)より引用

(26) 『帝国図書館沿革史案（第一次資料）』昭和四年十月十一日の項

(27) 同右。六年四月二日の項。松本喜一「御進講の恩命を拝して」（図書館雑誌　二十五年五号　昭和六）

(28) 同右『沿革史案』十七頁〈昭和六年〉の項。

(29) 松本喜一「帝国図書館と私」

(30) 平野零児〈毎日記者、著述家〉「怨めしや図書館」。(29) とともに雑誌「書斎」に発表された随筆（初出誌いづれも未見）で、のち、『書斎と読書』（昭和十六　三省堂刊）所収。

(31) 昭和十年代在館の旧職員回顧談。

(32) 帝国図書館年報、文部省年報などに所載の同館閲覧（統計）報告参照。『帝国図書館沿革史案（第一次資料）』の「八　閲覧状況」の項には「大正五年　従来長年ニ亘リ閲覧傾向ノ最高位ハ六門ニシテ　三門ハ次位ナリシガ　コノ年ヨリ三門ガ最高トナリ　六門之ニ次グ　コノ傾向ハ支那事変勃発後産業部門ノ閲覧傾向ノ急進スル迄到タル」とある。

——文中の〝〇門〟とは帝国図書館八門分類*による主題部門を示す。本稿末尾の閲覧統計表参照。

* 加藤宗厚『図書分類法要説』（初版昭和一六。改訂増補版　昭和三四）中の「図書分類の歴史」の章に詳しい。そのほか、後掲注(42)の諸論考および小野則秋「わが国に於ける図書分類法の歴史的一考察」（『仙田正雄教授古稀記念論文集』所収　昭和四五）をも参照。

(33) 前掲『沿革史案』十八頁（規則第一条の改正）

(34) 中央図書館長協会「中央図書館令制定ニ関スル建議　昭和一八・五・一九」（図書館雑誌　三十七年八号　昭和一八）——裏田武夫・小川剛編『図書館法成立史資料』（日本図書館協会　昭和四三）所収。

(35) 次項参照。大田栄太郎も、大越謹吾も、おのおのの文章末尾に、その稿の成った年月日を「昭和十六年四月三十日」と記し、「図書館雑誌」の同一号にとなり合って掲載されている。

(36) 大越謹吾「科学の振興と文献図書館の創設に就いて」（図書館雑誌　三十五年六号　昭和一六）。

筆者（大越）の「まえがき」によれば、この初稿には、〝帝国図書館論〟も予定されていたが、これより先、同じ「図書館雑誌」誌上に竹林熊彦による批判論が発表されたので（本文　前掲参照）、割愛したとあり、その、目次からうかがうとはっきりと、大阪にも帝国（国立の意）図書館を置く構想と認められる。

(37) とかく、現状肯定に満足しがちな図書館人の姿勢にあき足らない場合、雄大な構想が叫ばれることは、時代の新旧にかかわらず見られる現象であろう。敗戦後の焦土の中で、昭和二十二～二十三年に、当時の館界人をしてその〝ヴィジョンに驚倒〟と叫ばしめた雄大な計画をもって、発足した筈の国立国会図書館が開館十年後、庁舎新建築のほかは何事も我慢——の姿勢で運営されていた際、館内からつぎのような構想が打ち出されたことも、一事例たり得よう。

大島仁平「科学図書館の設置について」（山陽技術雑誌　十二巻二号　昭和三三）

(38) 戦時中から在職した職員の談話においても、戦前の参考事務は「昭和十年代に輪廓を作り上げたようだ」と回顧されている（本文前掲の『上野図書館の経験を語る』〈昭和四二〉十五頁参照）。

(39) 後掲の『読書相談ノ近況（昭和十年六月）』中、三丁めの「二　口頭ニ依ルモノ」に、「本館利用上又ハ規則等ノ一般案内」として掲げたうちに「写真撮影ノ手続」と見えている。

(40) 本稿脱稿後、にわかにお会いすることのできた大田栄太郎氏から伺い得た、短時間での直話によると、この間の事情はつぎのとおり

「私（大田）は、昭和初年嘱託でいたが、松本館長から〝お前は閲覧者として利用していた*頃、（館の利用方法に対して）よく文句を云っていたのだから、蔵書のことも判るのだろうから〟と云われ、植野さ

んが、写真サービスの方に忙しくなられたこともあって、参考事務を専門に手がけるようになりました」

＊大田栄太郎編『滋賀県方言集』（昭和七年　刀江書院刊）には、柳田国男が序を寄せて、「全国の方言の比較を自分の事業とする、若き学徒の出現を喜び迎へる……」と推賞している。

〈昭和四五年、『方言調査研究資料目録――主に戦前を顧り見て載恩記とともに』が刊行され、大田氏の業績が、さらに明らかにされた〉

(41) 昭和年間、戦前から戦中期における帝国図書館職員数（各年報による。兼職・非職・休職を含む）はつぎのとおりである（『八十年略史』一七〇頁）。

昭和	人
7年	138
8	146
9	151
10	154
11	156
12	126
13	138
14	142
15	146
16	145
17	142
18	117
19	96
20	94

(42) 加藤宗厚　帝国図書館沿革、目録及分類概説〔付帝国図書館分類表〕（図書館研究〈青年聯盟〉一巻三号　昭和三）、乙骨達夫「支部上野図書館閲覧目録の変遷及び現状の概要（〔国立国会図書館〕図書館研究シリーズ一号　昭和三五）、小林花子　明治初期上野図書館における目録編纂史稿―上、下―（書誌学　新一、三号　昭和四〇、四一）など

(43) 「文部省図書館講習所規則（昭和十六年改正）」（図書館雑誌　三十六年一号　昭和十七）「文部省図書館講習所の新陣容」（図書館雑誌　三十六年四号　昭和十七）

編集委員会あとがき

本論文は、最初、本誌創刊号に収載すべく、昨年九月、すでに筆者の手を離れ、編集事務担当者の手許にとどけられていた。しかるに、創刊号収録の原稿量がいずれも予定頁数をこえたため調整の必要が生じ、筆者の了解を得て本年一月末に刊行予定の第二号に廻すこととした。

第二号の初校終了後、筆者は、はからずも北原圀彦氏の研究に出会う（本文十四頁参照）。同一対象の研究である以上、公表の前後関係は研究者にとって決して無視し得ぬ問題をともなうものである。筆者が再校に当って、やむを得ず、最少限必要とする加筆をほどこした結果は、予期しない印刷事情から、当時、予定刊行日を延引できない事情のため、再び筆者の了解を得て、結局本論文の掲載を見送ることとなった。

このような、事務上止むを得ぬ措置とはいえ、編集担当者のこの処置と、また今後の掲載辞退を求める筆者の強い要望をめぐって、編集委員会は慎重な検討を重ねた結果、

㈠貴重な研究の成果が、それぞれに事情があるにせよ、何度も見送られることは決してくり返されてはならない。

㈡編集委員会は、編集実務につきとかく事務局まかせであった点を反省して、その運営体制を改善し、責任を明確にすること。

を申し合せた。また、本論文については、依然として独自の内容・資料性を有することを確認し、あえて筆者の翻意を求めることとした。幸い筆者の了承を得てここに掲載することを得たが、残念ながら、その後も、筆者のもとに集った関係資料のいくつかについては今回も印刷の制約上、加筆を一部分にとどめ、他日を期していただくほかなかった。

以上、本論文の発表にいたる経緯を述べ、これが、発足間もない本誌編集委員会にとって貴重な反省の機会となったことを明確にし、筆者ならびに読者の御諒恕を願う次第である。

（伊藤　記）

【資　料】

読書相談ノ近況

昭和十年六月
帝国図書館

〔表紙〕

図書ノ選択読書ニ関スル調査　並ニ目録ノ案内*

*〔これは、見返しに一行記されたもので、「読書ニ関スル」の辞句はあとから補足されており、記載後に「目録ノ案内」の語を転置しようとした形跡が見受けられる（図版参照）〕

読書相談近況

第一　質問形式ヨリ観タル読書相談例

図書調査質問ヲ其ノ形式ニ従ヒ類集スル時ハ概ネ左ノ如シ

一、書信又ハ電話ニ依ルモノ

甲　図書ノ選択、列挙、調査

㈠　書名ヲ指示シテ（図書、雑誌、新聞等）

1　館蔵ノ有無
2　館ノ函架番号
3　著者編者訓点者、校註者氏名、発行所並所在及電話番号、郵税、形体装幀
4　著者ノ住所
5　訳本ノ有無、訳述訳註ノ範囲
6　版次、特定版ノ有無並巻数、頁数
7　著述ノ年代並之ヲ推定スベキ典拠、出版年紀
8　簡単ナル内容、内容目次
9　異本ノ校証
10　逐次刊行物ノ範囲
11　当該図書雑誌類ノ所蔵館名、所有者氏名

㈡　著者ヲ指示シテ

1　著作物全部
2　或主題ニ関スル著作物
3　訳本ノ書名

㈢　主題ヲ指示シテ

1　図書全部（書名其他）
2　適当ナル図書
3　記述ノ登載セラレタル図書
4　二種以上ノ図書ノ優劣特質ノ比較
5　指示セル主題ニ関スル挿画写真ノ有無並其ノ説明

乙　特定事項調査参考書ノ指示

㈠　姓名、名称並所在

例1　学校団体、社団財団法人、高等文官試験官、学校教職員、郷土資料蒐集家、古書籍商、特志家、医師、個人

㈡　年　月　日

例1　某銀行及会社ノ設立並破綻ノ年月日　某氏外遊帰朝ノ年月日　某氏出生、死亡ノ年月日　展覧会、博覧会開催ノ年月日　某船艦ノ進水並沈没ノ年月日

㈢　数　量

例1　各国ノ出生、死亡率　重要食糧品ノ生産、消費額　全国ノ図書館並閲覧人員数

㈣　引用文句ノ出典、文字ニ関スル故事来歴

丙　古写本、古刊本ノ鑑定、系譜ノ決定、文字ノ訓読正誤ノ判定

二、口頭ニ依ルモノ

本項ニ属スル質問ノ様相ハ一、書信又ハ電話ニ依ルモノト大体同ジナルモ尚ホ右以外ニ於ケル応待事項ハ概ネ左ノ如シ

(一)　本館利用上又ハ規則等ノ一般案内

1　借覧ノ手続、帯出ノ可否（閲覧係ニテ大体之ヲ行フモ本係ニテ援助ス）

2　写真撮影ノ手続

(二)　目録使用上ノ援助

1　一般目録ノ種別、所在ノ指示

2　逐次刊行物標示札ノ指示

3　件名ノ指示

第二　主題形式ヨリ観タル読書相談例

図書調査質問ノ内容ヲナス主題ハ多種多様ニシテ百般ノ事項ニ亘リ各々列挙シ難キモソノ一班ヲ挙グレバ左ノ如シ

第一門　神書及宗教

神話伝説ノ種類及発達史　三種神器　官国弊社ノ所在地　伊勢神宮　神祇並神祇史　神社祭祀ノ起源並祭礼ノ模様　仏教ト日本文学　謡曲ニ表ハレタル仏教思想　仏教ノ根本思想　方等経般若経、涅槃経ノ註釈良書　仏事法要　弘法大師（禅門ニ関スル文献）　写経ノ研究　徳川歴代将軍ノ法戒名　長崎ニ於ケル基督旧教徒　踏絵ニ関スル文献並絵画　教会ノ発達史　西国三十三箇所御詠歌講話　天女ノ図版（神社仏閣ノ彫刻、絵画）皇道日月教　生命ノ実相、烈風、実在　日ノ本教典（神輿ニ関スル文献）　相場、金銭ニ霊効アル神仏　恵比須、大黒並昇天ニ関スル文献

第二門　哲学及教育

哲学、論理学、心理学ノ良書　ヘーゲルノ法律哲学　桑木厳翼博士ノ著述　実験心理学　科学ト哲学トノ関係　催眠術、記憶術　倫理学ノ良書　各藩校ト其教育法並教科書　徳川時代ノ庶民教育　（欧米ニ於ケル東洋思想殊ニ支那学ノ研究）　儒教哲学ノ根本思想　周易講義、陰陽ト筮ヲ平易ニ記述セル文献　我国ノ古代教育制度　秀才教育、特殊教育　明治二十三年小学令改正要旨ノ説明　国史・東洋史・西洋史教授法　東京市附近ノ獣医学校所在地並其優劣　中等学校入学案内　女学生ノ読書傾向　本邦ニ於ケル幼稚園ノ発達　学校建築ノ新様式　（鍼灸術学校名並所在）　学校衛生殊ニ学生ト肺病　留学ノ手続　学位論文ノ目録並其ノ作成ニ就イテノ参考書　オリンピックヲ日本ニ開催スル理由　ヘレンケラー及教育病理学　国民精神作興ニ関スル文献　幼学綱要ニ関スル文献　国民的儀礼訓練ニ関スル研究参考書　貸本屋ノ発達並変遷　Chautauqua　黄道吉日並禁厭　外国ニ於ケル大学ノ名称、所在、組織　日本並世界ニ於ケル図書館ノ名称所在　民間信仰

第三門　文学及語学

川柳、狂歌ノ作リ方　（狂歌狂句、川柳集）日本書紀、古事記ノ註釈書　太閤真顕証ノ解説　一茶、良寛ニ関スル文献　源氏物語ノ註釈書（天路歴程ノ訳本）中院入道集　（馬琴ニ関スル文献）　国民精神ヲ作興セル軍歌集（狐ニ関スル文学上ノ文献）近松ノ浄瑠璃ト仏教思想　（白隠和尚ニ関スル文献）　謡曲本ヲ

註釈セル良書（良寛和尚・・・）　蟬丸（税所敦子ノ伝記）　草紙ノ変遷ト時代思想（中等学校生徒ニ読マセル偉人伝記）　桑韓筆語唱和集　天和版（俳句ノ季題）　ポーランド、ノルウェーニ関スル文献　トーマスハーディノ訳本　ヴィクトルユーゴーニ関スル文献　ヘルマン　ヘッセノ訳本書名全部　古語拾遺、源氏物語、落窪物語ノ外国語訳本　小泉八雲ニ関スル文献　東西文学書ニテ肺病ヲ取扱ヘルモノ　怪談異聞（臍ニ関スル文学上ノ文献）　俠客、盗賊ニ関スル文学書　郷土文人伝記著述並郷土出版物　○方言及俗語　俚諺ニ関スル参考書　満洲語　露西亜語（蒙古語ノ動詞ト活用）　英語入門程度ノ良書　ヘブライ語ノ文献（シャム語文法ニ関スル文献）　ローマ字ヲ日本語ニ表現スル方法　現代ニ適用セル仮名遣　書誌学

第四門　歴史　伝記　地誌及紀行

小学校歴史教材挿画ノ出所　○太田道灌ニ関スル文献全部　聖徳太子ノ伝記　徳川幕末史　嘉永年間ノ事蹟（徳川歴代将軍ノ法名）　平賀源内ニ関スル文献（多田満仲家系図）　佐久間象山ノ伝記（細川忠興ノ妻おたまの方ニ関スル文献）名婦ノ伝記（蓮月尼ニ関スル文献）　北条時代ニ於ケル女性観（南条文雄ノ伝記）　シーボルトニ関スル文献（ペルーニ関スル和洋文献）　ロスチャイルド家ニ関スル文献　ナポレオンニ関スル和洋文献　姓氏ノ起源　系譜ハ回数甚ダ多シ〉　韓信股クグリノ図絵並史的説明　淡島椿岳ノ物売ノ図ノ説明　我国国旗ノ起源　江戸ノ郷土誌　武蔵風土紀ノ註釈書　新宿ニ関スル地誌並伝説　伊豆七島、八丈島ニ関スル地誌　筑波ニ関スル地誌　名所図絵ノ著者並伝記　肥前風土記　我国各地ノ温泉並其ノ分析　山陵記　国立公園案内記　地図ノ描図式及其ノ実例　満洲国ノ地図（上高地案内）　江戸ノ背ノ地図　明治天皇東北御巡幸　東海道ノ交通路変遷ニ関スル文献　養蚕ノ歴史的研究書（漁業誌ニ関スル文献）　家紋研究ノ参考書　エチオピアニ関スル文献　南洋諸島ノ地誌並人口、産業

第五門　国家　法律　経済　財政　社会及統計学

我国ニ於ケル既成政党史　国際連盟脱退後ノ日本ト各国トノ国際関係　政治学ノ良書　政治制度史　ファシズム研究ノ良書（ファシズム批判ノ文献）　官庁ノ沿革（出版法規書）　憲法学研究ノ参考書（株式会社法）　官報前ノ官報ニ類スル文献（英・米・仏ノ一九一〇年後ノ法令集）　民法改正要綱ノ説明書　古代法制ノ研究　民法研究ノ良書　古代刑罰研究ノ参考書　服忌ニ関スル文献　登記ノ手続　発明、特許ノ手続　国籍法ノ参考書　古金銀銭ニ関スル文献　銀相場ノ変動ト我国ノ経済関係　平価切下ト経済界ノ変動　物価ト商品ノ価値　南米移民ニ関シ産業、風習、手続等ノ参考書　景気予測並経済統計　工場慰安施設　廃娼後ニ於ケル施設並当局ノ方針　天変地異其他ノ記録及之ガ救恤ニ関スル文献並絵画　若衆五人組制度　東京市居住者生活統計　東京市内家賃ノ統計　饑饉備荒ニ関スル文献並絵画　新聞発達史　一向一揆　入墨（金儲ケニ関スル文献）　自動車取締規則（国旗ニ関スル文献）　産業組合ノ定款並書式　山窩　雲助　国際文化団体ノ名称並所在

第六門　数学理学及医学

数理統計学　和算、点算　素人ニ会得セラルヽ気象学　植物繊維学　動物、植物、鉱物学ノ入門書　食品化学　植物生態学

（生物植物学ニ関スル外国雑誌）少年ニ科学知識ヲ普及セシムル良書　○鉱物鑑定用ノ良書　我国ニ初メテ飛行船ノ飛ビタル記事　渦動力学　液体力学　地動説　○家庭医学　漢方薬ノ製法　出産（看護ト手当法）　針灸（結婚前後ノ知識）　物理療法（神経衰弱予防法）　西式健康法（接骨道ニ関スル発達沿革史）　遺伝ニ関スル最初ノ新聞論説（病気禁厭）　野口英世博士ト我国ノ医学　読書ノ眼ニ及ボス影響

第七門　工学　兵事　美術　諸芸及産業

精密機械　木工機械　航空原動機　内燃機関　時計ノ機構並修繕法（材料強弱学ニ関スル文献）　造船構造（自動車車室用スプリング）　ディゼルエンヂン（人工タイルニ関スル文献）　グライダァー　光学殊ニレンズ製造（工作機械ニ関スル文献）　橋梁学　機械製図　水道浄水設備　白蟻ト建築物　海上気象ニ関スル参考書　住宅設計並費用　室内装飾　茶室建築並茶道（石垣ノ石積ノ方法ヲ書ケルモノ）　材料強弱学　日露戦役ニ関スル絵画　築城ニ関スル文献並図絵　我国古代ノ兵制及軍備　屯田兵ニ関スル文献絵画　刀剣鑑定書　武芸及武芸家ニ関スル文献　柔術ノ起源並発達史並絵画　隠レタル画家ノ伝記（日本画講義録）　絵画製作ニ対スル紛本的資料（画題各種）　鳥居清長ノ作品（戦軍記、合戦記ニ関スル絵巻）鋳造　ラスキンノ絵画作品集（この二項は欄外に追記のもの）　能装束並能面ニ関スル文献並図録　書道ニ関スル文献　花押ノ研究書　写真術ニ関スル参考書　風俗歌ニ関スル文献並図絵　俚謡民謡並其ノ変遷　演劇番附　茶道並香道　蓄音器ノ選択法（民衆娯楽調査ニ関スル文献）　電気蓄音器並ラヂオセット製造法　蓄音器レコード鑑賞選択法並保存法　郷土玩具ノ種類　木工玩具　繰リ人形　焜爐ノ起源並変遷　フランス人形製造法　スキー、スケート（スキー製作法ニ関スル文献）　登山用ロープザイル（玩具ニ関スル文献）　麻雀・囲碁将棋入門書（刀剣鑑定法ニ関スル文献）　釣り案内書　蠟染ニ関スル文献（鹿子紋ニ関スル文献）　丁抹ノ農業　作物病害駆除法（殖林経営ニ関スル文献）　養鶏、養豚ノ良書（折紙細工ニ関スル文献）　アンゴラ兎飼育法　シェパードノ訓練法（馬ノ調練法）　闘犬、闘鶏（狩猟、猟犬訓練法）　日本庭園ニ関スル文献・図絵　家菜栽培法　万年青、蘭栽培法　鰯　魚市場ノ設備（酒醸造石高ヲ記載セルモノ）　製紙製麻業　商用広告　米穀取引　台湾近海ニ於ケル鮫族ニ関スル文献　我国輸出品ノ種別数量並販路　徳川時代ノ問屋　徳川時代ノ舟運　日本行商史　日本産業分布図　全国酒醸造ノ石高統計　葡酒蒟製造法　縄取紙製造法（書道ニ関スル文献）　アセチリン瓦斯製造法　セロファン製造法　レイヨン製造法（漬物ノ漬ケ方）牛酪製造法　カゼイン製造法（製靴ニ関スル文献）　脱脂綿製造法　商標ト広告心理　鏡ノ変遷ト製造法　染模様ノ図案

〔以下は、「社団法人日本図書館協会」の罫紙を使用する〕

支那服ノ作リ方　ファションスタイルノ洋裁　ミシン裁縫発達史　家政、家事参考書　製菓、製麺麭　カフエー経営法　ホテル経営法　建具雛形殊ニ欄間　鳥居ト石燈籠　常本倉・義倉　西暦一六一一年ヨリ一七〇〇年ニ至ル日蘭交渉　自動車操縦法　故事出典起源ヲ精記セル書目　全国農産物産地並其ノ取引市場・組合一覧

〔稲村徹元・校〕